

第5回千葉科学大学公立大学法人化検討委員会 会議概要

1 日 時 令和6年8月25日（日）14：40～15：40

2 場 所 銚子市保健福祉センター 2階会議室

3 出席者

○委員 10名出席

太田 康広 委員	出	小栗 一徳 委員	出	高岡 正幸 委員	出
田村 秀 委員	出	矢尾板俊平 委員	出	伊藤 晴美 委員	出
齋藤 隆広 委員	出	野本 春道 委員	出	林 広幸 委員	出
松本 恭一 委員	出				

○銚子市

市長、副市長、企画課長、財政課長、企画室長

○傍聴者 93名

○報道関係者 12名

4 会議内容

(1) 開 会

(2) 議 事 答申案について

【委員長】答申案について説明

【委 員】今後も銚子市には永続的に発展してもらいたいと思う。答申案3ページ目の7番に記載されているとおり、公立大学として成功していくためには、特色ある大学づくりが必須であり、併せて優れたリーダーシップを持ったトップの起用が求められる。地元の経済界、住民の方の熱意を求めるのであれば、それを受けて経営する側も熱意のある方に担ってもらい、リーダーシップを発揮していただきたい。変革の時期であり、必ずそのような方がいないと上手く移行が進まないと思う。その点を是非お願いしたい。

【委 員】スリムにすれば可能性はあるということは、当初から申し上げていた。危機管理学科に関しては、成田空港の第3滑走路が多古町に接続することから周辺の道路整備が進んでおり、空港の機能強化により3万人の雇用増が見込まれている。空港に勤務する人は、入れ替わりがすごく激しく、東京から通勤することは難しいことから、千葉県内で人材を確保している。銚子市は、成田空港まで車で1時間の立地条件にある。危機管理学科の卒業生が、従来の醸造業や水産業、風力発電の他にも、将来は成田空港で働くような可能性も広がると思う。看護学部に関しては、医療インフラ確保のために、行政の責任として残せたことはよかったと思う。看護学部と危機管理学科を残すのは、非常によかったと評価している。

【委 員】銚子市が持続可能性のある街として進んでほしいという思いは強い。他方で、現実には公立大学を取り巻く環境が非常に厳しくなっており、定員割れも出ている。一般入試の倍率が1倍または僅かに1倍を超えるところが出ている。そのような中で、この委員会で検討してきたが、おそらくベターな選択肢としてこのような案になったと思う。今後は、市と学園で協議をされるわけで、円滑に進むことを期待している。ただし、簡単に公立化ができるわけではない。移行等に時間がかかるかもしれない。場合によっては、岡山理科大学に、最終的に廃止となる一部の学部学科を、一旦引き取ってもらうなどしないと円滑に進まないかもしれない。これから様々な議論をしていく必要があるかと思うが、時間をかければよい話ではない。想定以上のスピードで少子化が進んでいる中で、あまり残された時間もない。銚子市と学園側で真摯な議論が交わされることを期待している。

【委員】産業界の意見といっても様々な意見がある。公立大学として受けるべきでないという極端な意見もある。そのまま全て公立大学で受けてよいという意見もある。産業界に限らず市民も同じだと思う。この検討委員会では、市長から諮問を受け、市の財政リスクを最小限にしてほしいという考えを基に検討してきたという印象であるが、結果的に、産業界としても大学を存続してもらいたいという意見が大勢なので、妥当な結論であったと思う。個人的には、少しスリムすぎるのではないかとは思っている。大学ができる前の20年間と後の20年間を比較し、銚子の変化をよく見ているので、地域における大学の必要性はよく分かる。これからの課題としては、どのような使命を持った大学にしていくかということ。学生に4年間来てもらうわけなので、大学を選ぶのと同時に銚子を選んでもらわなければならない。4年間生活する銚子が魅力的でなければ学生は来てくれない。大学の魅力と銚子の魅力を出していくべきではないかと思う。

【委員】在籍している学生が不利益を被らないように、公立化するにしまししないにしまし、そこだけは全力で担保していただきたい。千葉科学大学を選んで銚子にきている学生が地元で定着したり、地元で就職することは大切だが、銚子で学んだことで銚子に愛着を持ってもらい、別の場所に就職したとしても、何十年後かにまた銚子に関わってくれたり、力を貸してくれたり、仕事をしに来てくれたり、そういうことにもつながっていくと思う。やはり銚子の街を魅力的にして、学生が不利益を被らないようにするということを市民全体で考えていければよいと思う。

【委員】検討委員会の議論を通じて、様々なデータを見ながら、地元の方の話を聞いてきた。大学と学生達が銚子市にもたらした恩恵は非常に大きいと感じるとともに、社会情勢の影響で、課題も多いと感じた。今回の答申を踏まえて、市議会などでも様々な議論がなされると思う。私達市民一人ひとりが、この課題に対し覚悟を持って向き合っていく必要があると感じた。委員としての任務は今回で終わりとなるが、今後も1人の市民としてこの問題について考え、情報収集をしていきたいと思う。

【委員】検討委員会に参加した感想としては、当初は公立化して残した方がよいと考えていたが、実際に財務シミュレーションなどの資料を見てみると、それは無理だということが分かってきた。この答申に関しては、市の財政をできるだけ圧迫しないようにという形でまとまっており、非常によかったと思う。今後は、加計学園に答申を受け入れていただき、大学を存続させるようにしていただきたい。経済効果の額は少なくなっても残るわけで、多くの市民にとっても、よかったと思う。

【委員】子どもの数が減っていて、高校生の数が減っている。昨年、市立銚子高校で1クラス定員が減り、先日発表になったが、来年、県立銚子高校で1クラス定員が減るということで、市内の高校で2クラス、80名減ることになる。そう考えると、スリム化はやむを得ないと考えている。先日のアンケートでは、千葉科学大学への進学希望者は少なかったが、生徒の経済的な状況等を考えると、自宅から通えるところで勉強したい。自宅を離れるのは厳しいという生徒が少数ではあるがいる。そのような生徒にとっては、大学に継続してもらいたいところなので、できるだけ継続という方向で、答申案が出たことにほっとしている。

また、千葉科学大学附属高校に通信制がある。多様な生徒が増えており、全日制で学ぶことは難しくても、自分のペースで勉強できる通信制なら学べるという生徒が増えている。現在、80名くらいの生徒が通信制にいると思う。できれば続けてもらえたら一番よいと思う。

【委員長】通信制については、答申の8ページ評価のところでも少し触れている。会議概要にも残していただき、その懸念をしっかりと今後検討していただきたい。

【委員】今回の議論を通じて、銚子に限らず地方では、基本的には撤退戦になっている。少子高齢化と人口減少により全体が縮んでいく中で、どのように効果的に必要なインフラを削っていくかという話を様々な地域でしている。夢のある話をしたくても、むしろ何か様々なことを諦めていかないといけない。何が諦められなくて、何を諦めるのがよいのかという選択をしているということで、今回もそのような撤退戦の一環だったと思う。

銚子にとって、どのような形で大学がよいのか考えていたことが、答申の別紙2に書かれているコミュニティカレッジである。ユニバーシティという言葉は、日本では比較的安易に使われているが、国際的には、数万人規模の学生がいて、独立で病院と警察を持っている一大組織がユニバーシティである。人口数百万人の都市に、1個か2個あるものである。千葉科学大学をユニバーシティという前提で語ってきた部分があり、それは無理だろうというのが正直なところである。ただし、地域に根差した数百人単位のコミュニティカレッジというものがあって、学ぶのは18歳とは限らず、40歳代、50歳代の人がもう一度勉強しに行く。地域に根差して勉強したい人に対して教育サービスを提供し、その中からもう一段上に行くと、ユニバーシティに転籍する、卒業後に大学院でユニバーシティに行くなど、学習意欲の高い人が地域で学んで、場合によっては上のレベルに行けるルートがある。そういう意味でのコミュニティカレッジが銚子市に1個あれば、とてもよいと思う。地方では10万人以上の都市でも大学はあまりない。高校で進学校に行っても、大学に行くには市外に出ていくしかない。大学卒業後は、戻って就職する先もない。そのときに、コミュニティカレッジのような大学が自分の故郷にあったら、非常に良かったと思う。千葉科学大学を公立化して銚子に残していくとしたら、コンパクトで市民の方の活動の中心になるようなコミュニティカレッジとして残ることが、多少の財政負担が市にかかるとしても、存在意義のある地域基盤ではないかという気持ちでいた。委員長の見解に書かれていたことに、非常に共感した。

【委員長】10数年前ではあるが、前任校で募集停止、閉学ということがあった。地域から大学がなくなることを体験しており、在学生、地域住民、地域経済界の話を聞く中で、地域にとって大学はかけがえのない存在だということは、非常に感じている。一方で、今回、財務シミュレーションを実施し、経営という観点から見るとやはり厳しいところで、このせめぎ合いというのが、今回の議論だったと思う。

答申としては、できれば加計学園の経営努力による運営が継続されるという選択肢もあると思うが、もし公立化ということであれば、カレッジのような形で、地域のあらゆる世代がそこで学び、自分を成長させ、研究資源を地域に還元していく、地域の核になるような機関を作っていただきたい。

懸念されるのは、現役の在学生のことだと思う。第1回の検討委員会では、加計学園から公立化できなければ募集停止という話があった。仮に募集停止ということになれば、薬学部の場合、来年の4月の入学生が最後の学生ということになる。薬学部は6年制なので、基本的に令和12年度、2030年度までが大学として残された時間となる。そうした中で学生が不安を感じるというのは、10数年前に閉学する大学の教員として経験したことがある。加計学園には、もしもの場合は是非そこを丁寧に行ってもらいたい。また、より良い形で残っていくことを期待したい。

それでは答申案についてお諮りする。この答申案に異議はございませんか。

【委員】異議なし

【委員長】異議なしと認める。よって答申案のとおり決定した。今後は、早急に銚子市と加計学園で協議をしていただく必要があると思う。来月には来年度に向けた入試が始まると思う。先

延ばしができない問題であり、早い段階で結論を得ていただくようお願いしたい。

(3) 答 申 委員長から市長に答申書を交付

(4) 市長あいさつ

5回の検討委員会を通じて、熱心な討議をいただいたことに感謝を申し上げる。千葉科学大学の現状、これまでの取組、財務シミュレーション、財政効果、地元のニーズなど様々な視点から検討をいただき、公立化のリスクとメリットの両面から様々な意見をいただいた。

答申にあるように優先順位としては、私立大学としての存続が第一だと考えている。その方策として、加計学園による経営努力、経営改善によって存続されることが最も望ましいと考えているが、それが困難な場合には、他の学校法人への事業譲渡も検討し、進めることが必要だと考えている。これらを加計学園に求め、市としても協力をしていきたい。公立化は、こうした努力、検討をしても、どうしても困難であることが確認された場合において、閉校を避けるための最終的な手段であり、対応であると考えている。まずは、加計学園に今回の答申内容を報告し、協議を再開し、この答申を基本として市の考え方を示しながら、加計学園との協議をしっかりと進めていきたい。

委員の皆様には、今後の進捗状況も含めて報告をさせていただき、今後もアドバイス、ご指導をいただくこともあろうかと思う。最終的には、銚子市のみならず、市民の覚悟、責任を求められるのが今後の大学のあり方だと思う。

引き続きよろしくお願いしたい。

(5) 閉 会